

[others]

## 「社会に出て」

母校を巣立った学生が社会に出て約 10 ヶ月が過ぎます。今の心境を素直な気持ちで書いてくれました。

### “就職して感じたこと”



天理よろづ相談所病院 勤務短 16 回 錦 一聡

私は現在、奈良県天理市にある天理よろづ相談所病院に勤務しています。床数 1,000 床で県内でも規模の大きい病院です。放射線治療装置や RI 施設もあり、設備の整っている恵まれた職場です。

私は、主に一般撮影を担当しています。毎日 200 人以上、多いときは 300 人を超える患者様の撮影に対応します。撮影の正確さはもちろんのこと処理スピードも要求されます。さまざまな撮影オーダーがあるため、最初は撮影技術学の講義プリントを参考にさせて頂きました。日々撮影を行っていくなかで、医師のオーダー内容と患者様の状態からどのような画像が求められているのかを理解し、状況に応じた撮影をどのように行うか判断し、実践するための知識や技術が必要であると感じています。学生時代は膨大な撮影技術を少ない時間で教わり、管球の振り角とポジショニング、そして、それらの違いによって描出されるものを暗記しました。今は基本の撮影法をひたすら暗記しようとしていた学生の自分とは 180 度考えが変わり、目的部分を描出するためにはどうするかを考えるようになりました。これは基本の撮影法が分かっていて出来る応用なので、暗記をしていた学生のころの自分も無駄ではないと思っています。

働き出して一番必要だと思ったのは、臨床的な知識です。オーダーを出された時に何の目的で撮影しているのか分からずに機械的に撮影していると、撮影後の画像を確認しても医師に渡していいのか判断できないままになり、最悪、再撮影になりかねません。学生の頃に臨床的な部分を後回しに勉強していたこと、悔やまれてなりません。

また、学生の頃と大きく異なるのは患者様の接遇です。治療部門とは異なり、一般撮影は接する時間が短くても出来るだけコミュニケーションをとり、患者様の症状を少しでも把握できるように心掛けることが大切だと現場で教わりました。なかにはいつ急変して倒れるか分からない患者様の対応を迫られることもあり、学生の気楽さが今では懐かしいと感じています。

他に通常業務として、病棟ポータブルや、尿管ステント留置などの泌尿器科、骨折の整復といった整形外科における透視業務、ESWL(結石破碎術)も行います。透視においては医師や看護師という他職種の医療スタッフとコミュニケーションをとりながら業務を行います。私はチーム医療の一員であることを改めて実感しています。チーム医療は学生の頃には単なる単語でしかありませんでしたが、教わったことは大切なことなのだ実感しました。

診療放射線技師として働き始めてまだわずかですが、この仕事は、新しい知識や技術を身につけると、それだけ誰かの役に立てるということを実感できる素晴らしい職業だと思っています。これからも診療放射線技師のプロとしての自覚を持ち仕事に臨みたいと考えます。

## “診療放射線技師一年目、今思うこと”



神戸大学医学部附属病院勤務 短 16 回 米田 有希

学生の頃に私が思い描いていた理想の放射線技師像は、日進月歩の医療に負けない様に勉強をしながら、先生方や先輩方、そして患者さんから信頼され、頼りにされる技師でした。それは今でも変わっていませんが、学生の頃に考えていたのと社会人になってからは、自分の中で具体的に学ぶべき大切なことがより明確に見えてきたように思います。

学生の頃は、患者さんに親切に接し、ただ知識を増やす為の勉強をすれば良いものだと思っていました。しかし、実際に現場で働き始めると、先生方、先輩方、患者さんから信頼されるということは、当然ではありますが仕事を覚えて、患者さんの大切な命を預かっているという自覚と責任感を持って仕事をすること、そして、その業務が出来るだけ早く的確に行えるように機械の操作にも慣れること、この二点が大前提として必要であるということに気付きました。知識的な勉強だけでなく、技術的な勉強も必要であると感じたのです。

ですが、それは簡単なことではなく、働きはじめてからは注意されることばかりで、自分自身の至らない部分があまりにも多いことを痛感しました。医療に携わると言うことは人の命を預かるやりがいのある仕事だと、現場を知らない学生の頃はただ漠然と思っていたのですが、言い換えれば、人の命をいつでも危険に晒し得る責任重大な仕事だということに気付いたのです。いずれ当直の仕事も一人でしなければならぬのに、心の底では滞りなく出来るかどうか不安で仕方ありませんでした。

ところが、注意を受けたいくつかの点も、自分なりに見つめ直し改めていくうちに、最初は不安だった当直の仕事も、何とか一人でやる事が出来ました。仕事に不安を抱えている時や失敗して落ち込んでいた時に、学友会の総会等でお会い出来ました先輩方や、久しぶりに再会出来た先生方にお話を伺って、元気付けて頂いたことは、とても励みになりました。同じように、共に学び卒業した学生時代の友達とも、情報交換をしたり励まし合えることは何よりも嬉しく感じます。同じ仕事に携わっている先輩、同輩がいるということは、こんなに貴重で有り難いものであるということが、卒業して改めて実感しました。

まだまだ未熟ではありますが、これからも注意を受けた部分は謙虚に受け止め、同じようなことで指摘を受けないようにし、少しずつでも自分の理想としている放射線技師像に近付けるように、技術面でも知識面でも日々努力をしていきたいと思えます。私が努力して勉強すれば、その分、結局は患者さんの元へ還ることになると私は信じています。

## “働き始めて感じたこと”



周南記念病院勤務 短 16 回 小林 裕太

この 3 月に京都医療技術短期大学を卒業し当院に入社して半年近くが過ぎました。病院に就職をしてこの半年間で色々と思えることがありました。学生時代は診療放射線技師としての基礎、

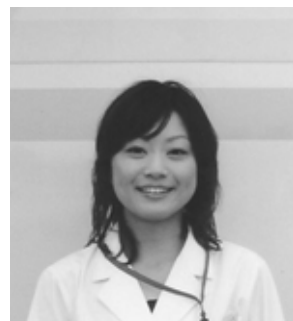
基本となる知識を身に付けることが主でしたが、実際働き始めてそれだけでは足りない部分もあり教科書通りにポジショニングを行っても患者さん一人一人個人差があるので必ずしもそれだけでは求められている画像はできないと痛感しました。そこが難しいところでもありますが、その反面どのように工夫して撮影を行えばよいのかを考え新しい知識を取り込んでいくことにやりがいを感じています。その他には、患者さんとの接し方です。患者さんにどのような検査なのかを理解してもらい、撮影中いかに不安を取り除き、安全に撮影を行っていくかが重要です。一言声をかけるのにも患者さんがどのように感じ取り、どう思うのか考えさせられます。

現在、担当している業務は一般撮影、CT検査、OPE室での撮影・イメージなどを担当しています。今担当させていただいている検査が一番興味のある分野なので勉強会などにたくさん参加し知識・技術を多く学び、撮影する際、情報量のもっとも多い最高の検査データが提供できるようになりたいです。

先日、山口支部同窓会に参加させていただき山田勝彦先生、笠井俊文先生、小田紘弘先生と大学の先生方にお会いすることができ歴代の先輩方の貴重な話を聞かさせていただきました。どの先輩方も楽しい会話の中にも仕事の話真剣にされ、常に向上心を持たれていらっしゃいました。まだ新米の技師ですが、先輩方のように常に向上心を持ち一つでも多くの知識・技術を盗み一日でも早く先輩方に追いつけるようがんばりたいと思います。

“『自分の健康を考えてもらうため！！』

それが私の仕事です。”



滋賀県健康づくり財団勤務 短 16 回 服部 千恵

私は検診バスで出張検診をしています。検診業務は胸部・胃がん・乳がん・子宮がん・大腸がん・骨粗鬆症とありますが、現在主に担当しているのは乳がん検診でマンモグラフィの撮影を行っています。

検診では自分の体の健康を考えてもらい、より多くの方に検診を受けていただくことで健康の推進を呼びかけています。自分自身この職場で働くことで健康について考えるきっかけになったと思っています。現在死亡率第一位である「癌」であっても検査によっては受診率の低いものもあり、特に父や母などの年代(40～50代)の方には検診を受けてもっと自分の体の健康への意識を高めてもらいたいと強く感じています。

そのための啓発活動の1つとして、滋賀県では平成19年11月4日に乳がんに関わる医師、看護師、技師、がん患者などが集まり「琵琶湖ピンクリボンフェスタ2007」が開催されました。乳がんは25人に1人はかかる病気であり、他人事ではなくもっと身近にある病気である事を知ってもらうと同時に、乳がんに対する正しい知識を学んでもらい、早期発見のためにマンモグラフィやUS、自己触診法の重要性を知って広めようという目的で行われました。無料の乳がん検診(マンモグラフィ・US)や講習会があり、私達もマンモグラフィの撮影で参加しました。乳がんは早期に発見できれば高い確率で治癒する癌であるにもかかわらず死亡数は増えています。この活動で少しでも多くの方に乳がんへの関心と正しい理解を持っていただけたら嬉しいです。

出張検診の仕事内容は検診会場に出向き検診をし、職場に戻り現像をする流れです。時には朝が早い日もあり、夜遅くまで現像処理に追われる日もあり厳しい仕事だと感じる事もあります。また

検診では、決められた時間内に多くの人を撮影しなくてはなりません。さらにより正確な撮影技術も要求され、慣れない頃はそのプレッシャーに悩んだ事もありました。そんな時職場の先輩方にポジショニングなどのアドバイスをいただき、次の検診の中で実践し自分のものにしていけるように日々努力しています。また短大時代の友達とも連絡を取り合い、意見や情報の交換をしてお互いにプラスになるよう高め合ったりもしています。そんな親身になって教えてくれる先輩方や大学の良き仲間に出会えた事で毎日勉強しながらも充実した仕事に取り組めるのだと感謝しています。

これからはマンモグラフィの認定試験を受け、様々な講演会にも参加して撮影技術や知識を増やして技師としても成長していきたいです。また啓発活動にも積極的に参加して健康への呼びかけもしていきたいと思います。

以上

\* 通巻 186 号 2008 年 1 月 10 日発行(H19-No.4)より